

名詞句と名詞節の間

——「のこと」が生じる存在文——

大西美穂

キーワード 存在表現 名詞句 「こと」名詞節 談話機能

1. はじめに

存在表現のうち、「名詞句＋のことがある（いる）」（以下「Nのことがある」とする）という形式を持つ「花子のことがある」のような表現は、連体助詞「の」、形式名詞「こと」、存在動詞「ある／いる」といったいずれも抽象度の高い要素で構成されている。認知文法では、これらの要素は依存的な要素であるとされ、自律的な要素との組み合わせによって文が構造化されるという（Langacker 2008）。ところが、「Nのことがある」においては、自律的な要素が「N」のみであり、「の」、「こと」、「が」、「ある」に関しては、程度差はあっても依存的要素であるため、構成要素の組み合わせのパターンが何種類かに分かれるという現象が起きる。すなわち、「Nのこと」、「ことがある」という、異なる組み合わせが解釈の単位となっていたり、さらに「Nのことがある」というより大きな単位での解釈が観察されたりする。

そこで本稿では以上の3種類の「Nのことがある」について、存在表現の特徴を基盤に分析する。この分析によって、「Nのことがある」が単文でありながら、埋め込み節を持つ「～することがある」のような複文の存在文と平行的な特徴を持つ場合があることを主張する。さらに、複文で表すべき内容を単文で表現する要因を、「Nのことがある」の談話機能の点から明らかにする。

2. 存在表現としての「Nのことがある」

「Nのことがある」の分類に当たり、名詞の種類に着目した分類は一部の用法には有効であるが（Nが固有名詞か普通名詞か、指示的かどうか、事態性の名詞かどうかなど）、分類の特徴付けの決定的な要因にはならない。Nに指示的な名詞が使われている点では共通している以下の例を比較すると、互いに異な

る解釈がされることが分かる。

(1) 息子のことがあるまでは、海外での移植手術なんて人ごとでした。(聞蔵 2007-1-24)

(2) 母は私のことがあるので、妹がいじめられていないかすごく気になっているようです。(聞蔵 2006-11-26)

たとえば(1)の「こと」は「息子」に関する「(なんらかの特定の) 出来事」が起こったことを意味し、存在動詞は出来事が〈起こる〉意味に解釈される。この出来事が特定の出来事であることは「あるまでは」の「まで」のような時間的位置付けを表す要素が出ていることから分かる。これに伴い、「こと」も比較的実質的な意味を持ち、特定の〈出来事〉という意味を持つ。(2)では「私のことがある」という存在文が「ので」によって原因節になっているため、「こと」は、出来事ではなく〈事実〉で、したがって「ある」も、この出来事ではない「こと」を時間軸に位置づける意味では解釈されない。

また、先行研究では「Nのこと」が生じる文の述部の違いによって分析する方法も取られているが、本稿の分析対象は存在表現のみであるため、「ある」、「いる」およびこれらの否定形が検討対象となる。

以上の観察から、「Nのことがある」の意味の拡がりを書述するための基盤となる存在表現の分類を提示する。存在表現の分類に当たっては、西山(1994、2003)、金水(1982、2006)を基盤とし、これに本稿の考えを加味した。ただし、存在表現は意味の拡張が広範に渡るため、網羅的に示すことはできない。以下の(3)には、本稿で用いるタイプのみを挙げた。

(3) 存在表現の分類 (一部のみ)

(A) 空間関係の存在表現

場所存在文 (例：机の上にバナナがある。)

所在文 (例：お父さんは庭にいる。)

(B) 存在の有無を述べる存在表現

絶対存在文 (例：大人でもピーマンが苦手な人がいる。)

リスト存在文 (例：人気の留学先として、ロサンゼルス、シアトル、
ニューヨークなどがある。)

(B') 所有関係の存在表現

所有文 (例：太郎には財産がある)

社会関係 (例：太郎は娘がいる。)

- 全体-部分関係 (例：太郎は白髪がある)
 抽象的所有 (例：彼らには規則を守る義務がある。)

存在表現は2種類に大別される。これを、(A)、(B)とした。(A)はある存在物の空間における場所関係を表現する存在文である。(B)は、名詞句で表現された概念に該当する何かが存在するかどうかを問題とする、つまり存在の有無を述べる存在文である。さらに、(B')の所有関係の存在表現は、存在文ではなく所有文である。所有文は、存在の有無を述べる点では(B)に含まれるが、独自の構造的、意味的特徴を有するため別分類とした。各下位分類には以下のようなものが含まれる。まず、(A)の場所存在文は、場所句(Lに)と存在物名詞(Nが)とが必須で、語順は「LにNがいる／ある」となる。所在文は存在物名詞が旧情報であり、その場所情報が焦点になるため、「NがLにいる／ある」で、Nは定指示となる。次に、(B)の絶対存在文は役割を表す名詞句1項のみを取るが、存在の有無が判断されるのは、この役割に該当する具体的対象についてである。西山(1994, 2003)は、これを変項名詞句とその値の関係で説明する。例文では、「ピーマンが嫌いな人」がいるかいないかを判断する際、これに該当する人がいるかいないかが問題となる。この絶対存在文に対し、「(ピーマンが嫌いな人として、例えば)うちの父がいる」のように、該当する対象を具体的に述べる存在文があり、これが次のリスト存在文である。リスト読みは絶対存在文に限らず、所有文に対応する場合もある。例えば「身分を証明するものがありますか——運転免許証と健康保険証があります」のように、所有物のリストを挙げることもできる。¹最後に、(B')の所有文は、(B)の存在文に比べ、所有者項が1項増えるという点で、文構造に違いがある。また、例文にあるように「財産」、「娘」、「白髪」、「義務」は不定の名詞句である。このため、所有者項との関係で、これらの名詞句の指示対象が決まるという特徴がある。²なお、日本語においては上述のとおり、所有文にも存在動詞を用いるため、存在文および所有文を統括する用語として「存在表現」を用い、各事例は「存在文」、「所有文」のように示す。

以上、存在表現の分類のうち、本稿で用いるタイプについて概観した。

3. 「Nのこと」の単位からの考察

本節では、「Nのこと」が生じる存在表現を、思考や感情の対象の存在を示すタイプと、名詞句のモダリティを含むタイプとに分け、それぞれの特徴を述べ

る。以下は、思考や感情の対象を表すと考えられる存在表現の例である。

- (4) 頭の隅には常に病気のことがある。でも健康な友人と話しても、不安な気持ちをなかなかわかってもらえない。(聞蔵 2004-5-22)
- (5) スタッフの頭には常に新しいメニューのことがあるという。(中日 2008-9-29)

(4)には、比喩的な場所句「頭の隅には」(破線部)が現れている。「ある」は波線部で言い換えているように「気持ち」などを〈抱く〉、あるいは何かを〈気にする〉といった解釈になる。(5)には「スタッフの頭には」が生じている。「頭に」以外にも「心に」の例があり、「片隅に」などを伴うことも多い。この場所はメタファー的な場所であり、存在表現も、場所関係を示す場所存在文の構造になっている。³

さらに、この例は(6)のように否定ができる。

- (6)彼は趣味の釣りに夢中で、仕事のことは頭にはないようだ。

否定ができるという特徴は、後述する原因・理由を提示する存在文との相違点であるため、後に詳しく考察する。また、この例では「仕事のこと」が場所句「頭に」より前にでており、所在文の構造を持つ。

次に、笹栗(1999)が名詞句のモダリティを表すとしている「のこと」に当てはまる例を見る。

- (7)もちろんお客様には犬のことはいいないように無視していてもいいです。(むだ吠えについて - BIGLOBEなんでも相談室 2007-9-22)
- (8)Aちゃんには仕事のこと色々優しく教えるけど、私のことはいいような扱いです。(www.nayamiweb.jp 2010-5現在)

(7)、(8)では、述部が「ない」ではなく「いい」となっているが、「犬がいない」という意味で解釈されることから、「Nのこと」の「こと」は主名詞ではない。もし、「こと」が主要部であれば、「犬のことがある」となるはずである。笹栗は、存在表現については検討していないが、「Nのこと」は、多くは好悪を表す述語とともに現れ、「太郎(のこと)が好きだ」のように随意的に現れるという。思考動詞や発話動詞の項に、いわゆるコト性名詞ではない名詞が現れる場合には「こと」の付与が必須となるが(例えば「太郎のことを話す／考える」

など)、ここで問題としている「のこと」は随意的に現れるため、必須の「のこと」とはふるまいが異なるということになる。このため、随意的な「のこと」は名詞句を構成するのではなく、名詞句のモダリティとして働き、述部に現れるモダリティ要素と呼応すると笹栗は分析している。この際、名詞Nは指示的でなければならないという制約があることも特徴として指摘している。

以上のように、(7)や(8)にはモダリティ要素として「のこと」が生じているとも考えられるが、ただし、実際に「いる」人物や動物について「いない」ことを仮定する意味を表す形式でしか現れない。(7)では「犬のことを無視する」という主文に対し、「かのように」で導入される副詞節が存在文を含む(「犬のことを、犬がいないかのように無視する」と解釈することもできる。この場合、「のこと」は副詞節の存在動詞とも主文の述部とも呼応するということになりうる。さらに、「私のことはいないものと思って」のような例もあり、「AをBと思う／考える」の用法であるとすれば、(4)、(5)同様、「思考や感情の対象」に分類されうる。

田窪(2010: 第7章)は、随意的な「のこと」を伴う名詞が生じる文はすべて複文構造を持つと仮定し、その構造から「のこと」の働きを名詞Nの個体タイプ上昇の明示であるとする。田窪の複文説は、「Nのこと」が複文と平行的な振る舞いをする場合があると主張する本稿の立場からも重視したいところではあるが、存在表現の研究の射程を超えたところで解決すべき点が多く現段階では取り上げることができない。稿を改め考察したい。⁴

4. 「ことがある」の単位からの考察

本節では「ことがある」の単位に注目し、まず、「出来事存在」と「原因・理由の提示」の2用法を、それぞれ4.1と4.2で指摘する。また、これらはいずれも複文構造を持つ存在表現(「～ることがある」や「～たことがある」)と同じ意味構造を持つ存在文であること、また、この2種類は異なる方策で複文構造と同じ意味構造を獲得していることを論じる。

4. 1. 出来事存在

この用法では「Nのこと」が出来事を表すため、解釈において時間概念が必須で、時制やアスペクトに注目する必要がある。具体的にはル形で状態性の出来事存在を表すため、「～ることがある」の形式で示されるアスペクト表現との平行性が指摘できる。この点で「ことがある」という複合的な単位の考察が

有効となる。また、これに伴い、「こと」の形式化が観察される。

出来事存在を表すこのタイプは、出来事が生起するという潜在性を表すが、未然の出来事が生起する蓋然性を問題とする場合と、習慣的な出来事を一般化して表す場合とがある。多くは、以下の(9)の「空洞」のように事態性(状態)の名詞が用いられるが、(10)、(11)のように固有名詞や普通名詞の使用も可能である点で他の「Nのことがある」との区別が難しい。

(9)台座や像の中は、時には空洞のことがある。(聞蔵2000-5-4)

(10)公演の会場は毎年変わり、東京のこともあるし、大阪のこともある。

(11)皮膚が黄色くなる黄疸が出て、腹痛をあまり伴わない場合、まれに自己免疫性膵炎のことがある。(日経2006-12-3)

(12)雨天の場合、中止のことがある。(cf. 中止になることがある)

(9)に「時には」、(11)に「まれに」(破線部)など頻度副詞が共起していることから、基準時(特に発話時)との関係で当該事態の発生の可能性や習慣を述べるアスペクト表現であることが分かる。いずれの「Nのこと」も、「Nであること」に置き換え可能で、つまり(9)-(11)はそれぞれ「空洞であることがある」、「東京／大阪であることもある」、「自己免疫性膵炎であることがある」と書き換えることもできる。このためこのタイプの「Nのことがある」は、コンピュータ文が名詞節として生じる複文の存在文「Nであることがある」として解釈されていると言える。また(12)は「Nになる」と交替でき、ある出来事が起こる場合があることを述べることで、さらに〈警告〉の解釈をもたらしている。

上述のとおり、このタイプの「Nのことがある」は、蓋然性を表す複文の「～ることがある」と比較可能である。確認のため、(13)にその例を示した。

(13)山田先生は2つのキャンパス間を行き来しており、不在であることがあるため、学生はメールで事前に連絡を取り…。

(13)では、下線部を「不在のことがある」に置き換えることが可能であることも確認できる。(9)-(13)は、存在表現としては存在の有無を述べるタイプの存在表現になっているが、その下位分類である所有文に分けられる。例えば(13)は、「山田先生(は)」というトピックが生じており、この人が個体として解釈され、この個体の局面レベルの習慣的行為を名詞節で述べているため、個体全体とその局面という全体-部分関係の所有文に分類される(「個体レベル」、「局面レベル」は、Carlson(1977)に依拠する)。(9)-(12)には特定の個人がトピック

クとして生じていないが、カテゴリー上位の概念、すなわち具体事例ではなく一般化した類 (type) の概念である「台座の像」、「公演」、「患者」などがトピックとして解釈されなければならない、この項を含めた所有文と考える。

以上とは別に、未然の出来事の発生の潜在性という意味を持つ存在表現には、同種の事態の生起を推測するタイプがある。

- (14)三月から八月にかけて、同検出器が誤警報や異常値を示すなど計五件のトラブルを起こしたことが議論された。(中略)「他の設備でも同様のことがあるのでは」との懸念の声も上がった。(中日2007-12-19)

存在を否定できる（「同様のことはない」）、頻度副詞と共起できる（「同様のことがよくある」）などの特徴から、存在動詞も出来事発生を表す「ある」であることが分かるが、複数の同種の状況を関連づける点が特徴的である。上の(14)では、もんじゅのナトリウム漏れ検出器に関わる設備不良が5件あり、「他の設備」でも起こっている可能性を述べている。類似する別々の環境において同じことが起こりやすいという推論、あるいは一般化が解釈の際に働く。

なお、この例は、複数の異なる場所（状況）で共時的に起こる出来事を述べているが、次節で見る「昨日」のような時間的前後関係を示す名詞がNに生じる「Nのこと」と、同種の出来事を関連づけるという点で意味構造が共通している。しかし存在文で推論や一般化に基づく結論的な「判断」を述べるか、次節の例のように、存在文で「根拠」を述べるかにおいて対立する。詳細を次節で検討する。

4. 2. 原因・理由の提示

本節で論じる存在文は、形式的には一文として独立していても、その解釈は文脈に依存する。特に前後の文脈で述べられる事態と因果関係を作ることの特徴とする。このタイプには、複文の存在文との平行性が指摘できる。しかし、複文としての解釈を動機付ける文脈は、前節（4.1）で見た出来事の存在を表すタイプと異なるため、この点も考察する。

まず、いくつかの先行研究において、「仕事が終わったこともあって、だいが羽目をはずして飲んだ。」（前田2006: 87）のような「こともあって」は複合辞として扱われている。前田は、これを「原因・理由の暗示的累加」の機能を持つ接続助詞と説明している。しかし(15)のように、接続形式（テ形）ではない存在動詞（二重線）で「原因・理由」を累加できる。また、累加の機能も「こともあって」の「も」のみの機能ではないかと考えられる。

(15)新作長編小説「1Q84」の出足が好調な背景には、村上春樹さんの国際的な注目度が数年で大きく上がったことと、久しぶりの長編ということがある。(東京 2009-6-6)

以上のような理由で、(15)のような存在文が、「こともあって」の形式を取らなくても原因・理由を表していると考える。前田は、名詞節（埋め込み節）ではない(16)のような「のこと」の例も挙げている。

(16)四ノ宮さんは、その夢が身体のこともあって叶わぬものと思えてきた、それが残念だというように言う。(前田2006: 92)

前田によれば、この「のこともあって」は、意味的には動詞や形容詞に付く場合と同様であるが、用法としては「のこともあって」が接続助詞として使われているというより格助詞に使われているようである」(p.92)という。この格助詞という記述は、原因・理由のデ格に相当するという分析であろう。

本稿の見解では、これが接続形式（接続助詞）や、複合格助詞であるという分析は不要である。つまり、存在表現として説明できれば、敢えて複合辞の記述をする必要はなく、説明を一般化することができる。そこで、本節では、名詞句「Nのこと」が生じる単文の場合も、名詞節が埋め込まれた存在文に準じて説明ができることを示す。また、(15)は、リスト存在文であり、原因・理由をリスト化、つまり「累加する」機能も備えていることを述べる。なお、以降に示す「Nのことがある」の例文には「から」や「まで」が使われている場合も、使われていない場合もあること、また、例文に話し言葉が多いことにも注目されたい。

まず、「Nのことがある」が原因・理由を累加する場合の特徴を、複文との平行性の点から見ていく。名詞Nは、どのように名詞や名詞句ではなく、名詞節のように解釈されうるのであろうか。(17)のような例が典型的である。

(17)「年金などのことがあるんだろうと思う。謙虚に国民の声に耳を傾け、耳を澄ましてしっかりとした対応をしなければいけない」。町村信孝官房長官は十七日の記者会見で、内閣支持率が一二ポイント急落して四三％となった日本経済新聞社の世論調査結果などについて、政府の年金記録問題への対応の不備に一因があったことを認めた。(日経 2007-12-18)

(17)の下線部「年金などのこと」は官房長官の発言内容の一部である。記事はこれを解釈して、破線部「政府の年金記録問題への対応の不備に一因があったこと」としている。この破線部から明らかになることが2つある。一つは「年金など」は「一因」と示されているように、〈原因・理由〉の意味で解釈されていることである。このことは、名詞節を埋め込んだ存在文と、名詞句「Nのこと」が生じる存在文との用法上の共通性を示す。もう一つは、「年金」は破線部の事態描写に含まれる一語であるということである。この例では、「年金などのこと」は、「年金」という表現を参照点に、メトニミー的にアクセスされる知識を照応した上で、そのことを「ある」と述べていると考えられる。⁵

では、なぜ「年金」という語が特に選ばれるのであろうか。また、他に「Nのことがある」のNとして選ばれやすい語はあるのだろうか。この名詞Nは、参照点として機能する名詞であり、またターゲットとなる知識はひとまとまりの出来事であると考え、以下に考察する。まず、(17)の「年金」のようなタイプについて考察する。山梨（1995: 168-9）は、名詞修飾節の主要部は表現の末尾にあり、情報のフォーカスが置かれると述べている。これを、以下の(18)、(19)の例に当てはめてみよう。

(18) 2戦欠場していた清原の7番起用について堀内監督は「足（左ひざの故障）のことがあるから、楽なところで出してやろうと思った」と冷静に説明したが、（後略）（聞蔵 2005-08-05）

(19) おやじはレコードのことを知っていたのかな、と思う。高校を出て、食べないままロックバンドをやっていた時も、あんまり文句を言わなかったのは、歌が好きだった実母のことがあるのかもしれないなど、今は思ったりする。（聞蔵 1995-7-31）

(18)では「足のこと」という監督の発言を引用し、「（左ひざの故障）」という解説が括弧で付加されている。この解説を用いて「足（左ひざ）が故障した」という出来事を言語的に復元してみる。その際、山梨に従えば、「足が故障したことがある」という場合と、「故障した足のことがある」という場合とは情報の焦点に違いがあり、前者は事態全体に注目、後者は出来事の構成要素の一つに注目していることになる。(18)では後者の情報構造を利用した解釈になるだろう。(19)でも、形式的には名詞修飾節「歌が好きだった実母」の主要部「実母」に、さらに「のこと」が接続しているが、わざわざ「実母」をコト化するより、「実母が歌が好きだったこと」と、出来事をそのまま名詞節にする方が効率が良いはずである。このような例も「実母」が主要部になることで、この要

素がフォーカスされ、表現効果を生み出すことを示唆する。また、修飾部の「歌が好きだった」という事実が聞き手にも既知で活性化しやすい情報であれば、談話において省略可能な部分となる（「活性化」という考え方はChafe（1994）による）。例えば、(20)のような会話が考えられる。

- (20)A: ロックバンドをやった時も、おやじが文句を言わなかったのは、実母のことがあるのかもしれない。——B: ああ、お母さん、歌がお好きだったからね。

この例で、話者Aは、「実母」が歌が好きだったことを述べていないが、このような発話は十分に容認される。また、話者Bは、それを理解していることを示す内容を、その応答に含めている。

次に見る例は、知識を活性化することができる「Nのことがある」のNの、上述のものとは別のタイプである。

- (21)6回裏 待望の先取点。女子生徒が「キャー」と跳び上がる。O.B.の厚海幸雄さん（54）は「一昨年のことがある。まだ喜べません」。（聞蔵 2003-07-28）
- (22)横綱のまわしが緩み、上手を引きつけられなかったのも作戦と見る。「おれにまわしを取られた時のことを考えていたんだと思う。いつもはきつく締めてるもん。先場所のことがあるから、そこまでしたんだろうね」（聞蔵 2003-05-15）
- (23)見送りに来ていた海洋科3年大山浩平君の母和美さん（48）は「健康面も心配だが（米原潜に衝突され沈没した）えひめ丸のことがあるから特に心配。」（聞蔵 2003-05-16）

(21)、(22)では、前例を根拠として持ち出すために存在文が使われている。破線の人物にも注目されたい。また、(23)の「えひめ丸」は、前例でもあり、また修飾部が括弧内に補われていることから情報のフォーカスでもある。いずれも、既に起こった失敗や問題を存在文を使って前例として持ち出し、同様のことが起こらないようにという用心や心配を述べる時の根拠としている。因果の関連付けは文脈内の人物（破線）、特に話者によるものである場合が多い。

前例と今後を関係付ける上述の例とは逆に、今後と現在の間に因果関係を提示する例もあるが、意味解釈のメカニズムは同じであると言える。(24)は、今後の出来事を想定するために存在文を用い、これと関連づけて「金を出す」と

いう結論を導いたことを意味する。

- (24) (収賄について)「長男が県議になれば世話になるし、以前から知り合いの安藤町長に対しても、今後のことがあるだろう」と考え、金を出すことにしたという。(聞蔵 1994-4-22)

以上の観察に基づき、存在表現としての特徴を示す。因果関係に関わる存在表現に生じる「ある」は事態発生を示すものではないため、「あった」のように過去形にならず、原因・理由が現在「ある」という意味で働く。これらの存在表現は「原因」や「理由」などの抽象概念の存在を前提に、その具体的な内容を挙げている点で、リスト存在文であると言える。

なお、(17)、(21)、(24)のように、「から」や「ので」が生じていなくても、存在文が理由の個別事例(リスト項目)を挙げる文として解釈される。ただし「Nのことがある」は「から」、「ので」で接続して複文を作る場合が非常に多い。特に談話内容の引用部分に多い。要因に名詞節と名詞句の情報量の違いがあると考え。これについては、5節で詳細を論じる。

最後に、以上のような原因・理由とは少し異なる意味解釈がされる存在文として、義務や責任など抽象的な所有を表す所有文を介するリスト存在文の例を見る。上述の、「先場所のことがある」のような、前例を関連づけて後件の内容を結論付ける用法では、前例が成り立てば、後件の内容も成立するという推論が基盤となった意味構造が観察された。しかし、以下のように、同時に複数事態が成立しないという前提のもと、一方が「ある」ため、他方を諦めるという結論を導き出すという意味構造を持つタイプもある。

- (25)「最後まで投げたかった。でも、チームのことがある。」(聞蔵 1997-08-01)

- (26)「君は日本にいないれば駄目だよ。杉子さんのことがあるから。僕は自由な内に行って来たい」(新潮100：武者小路実篤『友情』)

(25)では「自分の投球」と「チームのこと」とが、(26)では「旅行」と「杉子さんのこと」とが両立しない状況で、一方を優先させ選択することを述べる意味になる。これらは、所有文のリスト読みとして、リスト存在文に分類されることが考えられる。「チームのことはない」のように否定できないので、事態発生の意味ではなく、原因・理由の累加の例である。このタイプの存在文の解釈においては、「業務／子供のことがある」のようにある人に課された〈義務・責任〉があることが前提される。一人で相反する2つの責任を果たせない場合があり、

この抽象概念の帰属性（例：「私には責任がある」）に注目し、優先させる責任や義務の具体的内容を存在文で提示することが、他方の実現を阻む理由として機能すると考えられる。

以上、原因・理由を累加する「Nのことがある」をリスト存在文として分析した。

5. 談話機能

本節では、4.2で論じた「原因・理由」を提示する「Nのことがある」の存在文の2つの談話機能を示す。ひとつは、長く複雑な叙述を圧縮する働き、もうひとつは、複数の節や文から成るテキストに因果関係の結束をもたらす機能である。特に後者の場合、因果関係の原因と結果の配置が、複文の存在文で原因・理由を表す場合とは逆転するという現象がある。最後に、この2つの機能を関連付け、前者の叙述の圧縮という機能が、後者の原因と結果の配置の逆転を動機付けることを論じる。

まず、長く複雑な出来事の叙述を圧縮する働きについて考察する。すでに見た(17)、(18)の新聞記事（それぞれ(27)、(28)に再掲）では、記事の地の文ではなく口頭の談話を引用した部分に「Nのことがある」という表現が含まれ（下線部）、記事の地の文で情報を補うという現象があった（破線部）。

(27) 「年金などのことがあるんだろうと思う。謙虚に国民の声に耳を傾け、耳を澄ましてしっかりとした対応をしなければいけない」。町村信孝官房長官は十七日の記者会見で、内閣支持率が一二ポイント急落して四三%となった日本経済新聞社の世論調査結果などについて、政府の年金記録問題への対応の不備に一因があったことを認めた。(=(17))

(28) 2戦欠場していた清原の7番起用について堀内監督は「足（左ひざの故障）のことがあるから、楽なところで出してやろうと思った」と冷静に説明したが、（後略）(=(18))

談話の場において活性化されている知識は、個別の談話によって異なる。すでに活性化している情報を繰り返すことは冗長さにつながるため、情報をどの程度の精度で表現するかには、話者と聞き手およびその発話環境によって違いが生じる。話者による表現の精度の操作には情報の圧縮現象も含まれる。この圧縮という談話機能については、Schmid（2000）が、談話において抽象名詞が

長く複雑な情報を圧縮する機能を持つことを示している。ここでは、同様の機能が「Nのことがある」という表現においても見られることを主張する。(27)、(28)の「年金などのこと」や、「足のこと」という名詞句は、抽象名詞ではないが、その具体的内容を照応しようとしている。しかし、これらの例では、その具体的内容は言語表現内に明示されていないため、聞き手の知識によって情報が補完されなければならない。記事は、この補完が読者にとって困難場合に配慮し、「政府の年金記録問題への対応の不備」や「左ひざの故障」という情報を補っている。逆に見れば、ここに引用された口頭の談話部分が実際に発話された時の現場においては、その場の情報や文脈、また談話参加者の知識などから情報を補って理解することが可能であったことが容易に想像できる。その際「年金」や「足」という名詞が、出来事全体を想起させるきっかけとなるような機能を果たしている。この表現には、周知の知識を話者が敢えて長く説明することを避けるという方策が反映していると言える。このような方策を圧縮と呼び、「年金」や「足」は、圧縮された情報を復元するための表現であるとする。

次に、因果関係の原因と結果がどのように配置されるかについて観察し、複文の存在文の場合と「Nのことがある」の場合とでは、この配置が逆転する傾向にあることを示す。また、この逆転の要因として、情報の焦点が原因であるか結果であるかによって順序が交代することを論じる。まず、「Nのことがある」の例として、(28)の因果関係の原因 (CAUSE) と結果 (EFFECT) を、(29)に、{C} と {E} で示す。原因 {C} が存在文である。

(29) 足のことがあるから {C}、楽なところを出してやろうと思った {E}。

すでに述べたとおり、「Nのことがある」は、対応する複文の原因・理由を累加する存在文と比べ、「ので」や「から」などの接続助詞を伴うことが多い。このため、原因-結果 ({C} ⇒ {E}) の順に述べられることになる。(30)に再掲したような複文では結果-原因 ({E} ⇒ {C}) の順になりやすいが、これは原因 {C} が情報の焦点となっているため、この内容は圧縮したり省略したりされにくい。

(30) 文庫本が見直されている{E}らしい。値段が手頃ということ{C}もあるが、文字サイズが大きくなって高齢者が読みやすくなったこと{C}、カバーや帯に美しいイラストを使って見栄えが良くなったこと{C}などが考えられる。

(聞蔵2009-04-21朝刊)

一方、本稿で取り上げている「Nのことがある」が原因 {C} になる場合は、後置される結果 {E} が情報の焦点であり、話者が伝達したい内容である。このため、「Nのことがある」は、その背景的理由を述べることを目的に使用される。この情報は、話者が伝達したいと考えている情報の根拠であるため、聞き手にとっても既知の情報である方が、その目的に適している。以上のように、「Nのことがある」は、文脈や知識を旧情報として利用した表現である。また、情報の圧縮現象と、原因-結果の配置決定には関係があることが指摘できる。

以上、本節では、「Nのことがある」の2つの談話機能を示し、両者には関連性があることも示した。

6. おわりに

本稿では「Nのことがある」を、「Nのこと」という名詞句が存在表現に生じる場合と、「こと」が名詞節として解釈され「ことがある」の単位が何らかの働きを持つ場合とがあることを述べた。前者は空間関係の存在表現のメタファーであり、場所存在文、あるいは所在文の構造を持つ。後者は、存在の有無を表す存在表現で、出来事の内容を表す所有文および原因・理由を提示するリスト存在文の2種類に分けられた。以下に、それぞれの分類を例文とともに示す。

(31)名詞句「Nのこと」が生じる存在文 (A.空間関係の存在表現)

- a. 頭の隅に、いつも仕事のことがある。(場所存在文)
- b. 仕事のことは頭がない。(所在文)

(32)名詞節を持つ複文と平行的な存在文 (B.存在の有無を述べる存在表現)

- a. まれに自己免疫性脾炎のことがある。(蓋然性や習慣：所有文)
- b. 去年のことがあるので、心配だ。(原因・理由：リスト存在文)

(31)は、空間関係を表す意味から、メタファーによって考えや悩みを抱くことを表す意味に拡張していた。(32)では、「こと」が「名詞節」を作る名詞化辞のように働き、「Nのことがある」が、単文というより複文のように解釈されていた。この場合、「Nのこと」は節に相当するため、なんらかの出来事を表さなければならぬ。そこで、出来事を表すための方策として、(32)(a)のように名詞Nがコピュラ文として解釈される場合と、(32)(b)のように、名詞Nが参照点になり、前文脈や知識内のまとまりのある出来事を参照する場合の2種類を分析した。最後に、原因・理由を提示する「Nのことがある」が、この単位で談話機

能を持つことを示した。

課題として、名詞句のモダリティを表す、あるいは個体タイプ上昇を明示すると言われる、随意的な「のこと」についての問題が浮かび上がった。これについては、存在表現だけに起こる現象ではないため本稿の射程を超える。稿を改め検討したい。

注

- 1 リスト存在文の分類は、便宜的に(B)としたが、実際には(B)と(B')にまたがる特殊な存在文と言える。
- 2 所有者項は、例文からも分かる通り「には」や「は」でトピック化されることが自然であり、述語と関連付けられる事態参与者というよりは、話者や聞き手がある存在の有無を判断する際に参照する探索範囲として機能している。
- 3 「メタファー」は類似性に基づく比喩表現である。ここでは、実世界で体験できる場所関係を基盤に、この概念との類似性から「頭のすみ」などを場所のように捉えていることを指す。
- 4 問題のひとつとして、随意的な「Nのこと」は、「山田が田中のことを殴った。／*田中のことが山田によって殴られたよ。」(田窪 2010: 129)のように、受身化によって主語位置に出ることができず、Nのみが主語に立つということがある。これも「Nのこと」の単位が名詞句として機能していないことを示唆する興味深い現象であるが、存在表現は直接受身としては受身化されないため、本稿の射程内での検証が難しい。
- 5 「メトニミー」は隣接性に基づく比喩表現で、ここではフレーム知識を利用して参照点に隣接する情報を補完するような現象を指している。「参照点能力」は、話者や聞き手の記憶において活性化している情報や、まず理解しやすい情報を参照し、よりわかりにくく複雑な情報へアクセスすることを可能にする能力である。

[附記] 本稿は、日本語学会2010年度秋季大会（愛知大学豊橋キャンパス、2010年10月24日）および、京都言語学コロキウム（KLC、京都大学、2010年11月27日）にて行った口頭発表の内容に加筆・修正を施したものである。

参考文献

- Carlson, Gregory N. 1977. "A Unified Analysis of the English Bare Plural." *Linguistics and Philosophy*. 1; pp.413-457.
- Chafe, Wallace L. 1994. *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Heine, Bernd. 1997. *Possession: Cognitive Sources, Forces and Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 日高水穂 2006. 「「のこと」の機能：話しことばにおける新しい格表示」、益岡隆志・野田尚史・森山卓郎（編）『日本語文法の新地平』1、pp.83-101. 東京：くろしお出版.
- 堀江薫・パルデシ・プラシャント 2009. 『言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ』（「認知言語学のフロンティアシリーズ」5）、東京：研究社.
- 金水敏 1982. 「人を主語とする存在表現—天草版平家物語を中心に」『国語と国文学』、東京大学国語国文学会59(12): pp.58-73.
- 金水敏 2006. 『日本語存在表現の歴史』、東京：ひつじ書房.
- 工藤真由美 1989. 「現代日本語のパーフェクトをめぐる」、『ことばの科学3』、pp.53-118. 東京：むぎ書房.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2009. *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 前田直子 2006. 「原因・理由の暗示的累加を表す従属節：こともあって・ことだし」、藤田保幸・山崎誠（編）『複合辞研究の現在』、大阪：和泉書院. pp.87-102.
- 宮田公治 1999. 「「名詞＋ノコト」の機能分析」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』44/3, pp.51-60.
- 初山洋介 2001. 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喻」山梨正明他（編）『認知言語学論考』No.1: pp.29-58. 東京：ひつじ書房.
- 西山佑司 1994. 「日本語の存在文と変項名詞句」、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第26号: pp.115-148.
- 西山祐司 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』、東京：ひつじ書房.
- 大西美穂 2010. 「複文構造を持つ2種類の日本語存在文の比較対照」、『日本認

- 知言語学会論文集』第11巻 pp. 352-362. 日本認知言語学会.
- 笹栗淳子 1999. 「名詞のモダリティとしてのコト: 「Nのコト」と述語の左右間から」、アラム佐々木幸子 (編) 『言語学と日本語教育』 161-174. 東京: くろしお出版.
- Schmid, Hans-Jörg. 2000. English Abstract Nouns as Conceptual Shells. From Corpus to Cognition. (Topics in English Linguistics 34) Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 田窪行則 2010. 「第7章 日本語における個体タイプ上昇の顕在的な標識」、『日本語の構造-推論と知識管理』、東京: くろしお出版.
- 山梨正明 1995. 『認知文法論』、東京: ひつじ書房.

例文出典

(括弧内は例文に付した略記)

- 『聞蔵IIビジュアル』、朝日新聞社. (聞蔵)
- 『日経テレコン21』、日本経済新聞デジタルメディア. (日経)
- 『東京・中日新聞記事データベース』、中日新聞社. (東京) (中日)

